

岐路に立つグローバル・イノベーション: クラリベイト「Top 100 グローバル・イノベーター 2026」の包括的解析と全貌

Gemini 3 pro

1. エグゼクティブ・サマリー: 規模から「精度」への歴史的転換

2026年1月、クラリベイト社 (Clarivate Plc) によって発表された第15回「Top 100 グローバル・イノベーター 2026」は、世界の知的財産 (IP) ランドスケープにおける決定的な変曲点を示唆しています。過去10年以上にわたり、グローバルなイノベーションの物語は「規模」——すなわち、世界的な特許出願数の爆発的な増加——によって支配されてきました。しかし、2026年の報告書は、パラダイムが「規模 (Scale)」から「精度 (Precision)」へと移行したことを明確に示しています¹。

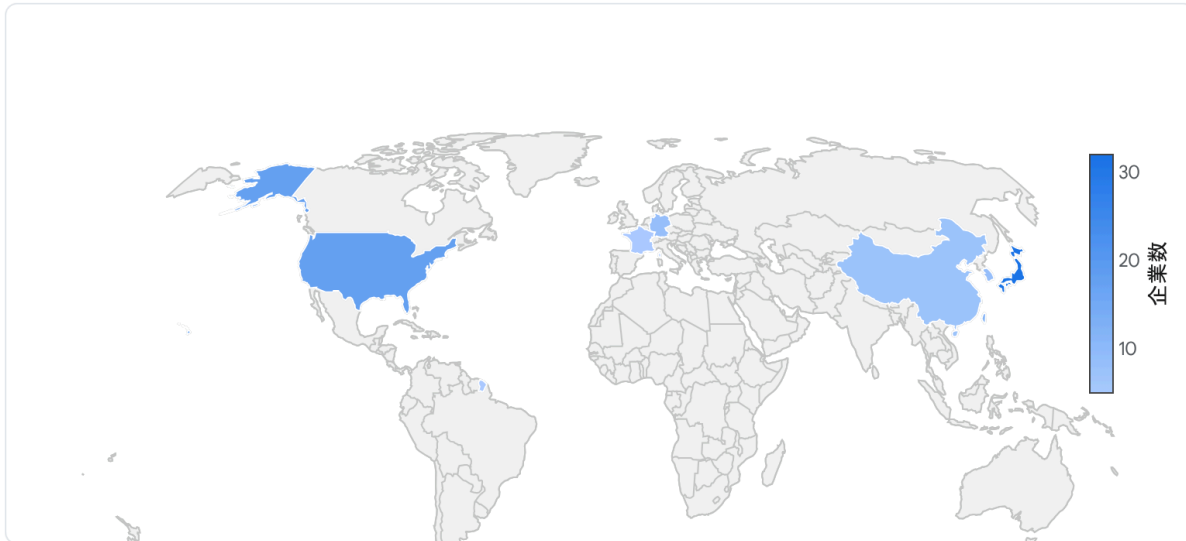
今年選出された100の組織を決定づけた特性は、単に保護されたアイデアの数ではなく、それらのアイデアが持つ戦略的な明確さと技術的な支配力、特に人工知能 (AI) 領域における圧倒的な質でした。本報告書の分析によると、Top 100に選出された組織は、世界のイノベーションエコシステム全体のごく一部であるにもかかわらず、**世界で最も強力な (High-Strength) AI関連発明の16%**を創出していることが明らかになりました²。この統計は、本年度のレポートにおける「ヒーローメトリクス」であり、技術的覇権争いが単なるIP資産の蓄積から、生成AIや深層学習をR&Dのライフサイクルそのものに統合するフェーズへと移行したことを裏付けています⁴。

地政学的な観点からは、2026年のランキングは東アジアの優位性を再確認するものとなりました。アジア地域は依然として「世界のアイデア工場」として機能しており、Top 100のうち6割以上を占めています。日本は、前年の選出数から微減となったものの、**32社**の受賞企業を擁し、国別で首位の座を維持しました⁵。これに米国 (18社)、台湾 (12社)、韓国 (8社)、ドイツ (8社) が続き、多極化するイノベーションの世界地図を描き出しています。特筆すべきは中国本土の躍進 (7社) であり、国家主導の「量から質へ」の転換が結実しつつあることを示しています⁵。

本レポートでは、2026年の調査結果を徹底的に解体し、真のイノベーターを選別する独自の評価手法 (メソドロジー) を詳解するとともに、リストを形成する地政学的な潮流を分析します。また、ソフトウェアの進化スピードが特許法の及ぶ範囲を凌駕しつつある現代において、このランキングが持つ妥当性と限界について、肯定・否定双方の視点から批判的考察を行います。さらに、32社の日本企業がいかんして経済規模以上の存在感を知財分野で維持しているのか、そしてその総数の緩やかな減少が示唆する日本の産業界の未来についても深層分析を試みます。

2026年 世界のイノベーションの現状

Top 100 イノベーターの国別分布



高強度AI発明のシェア

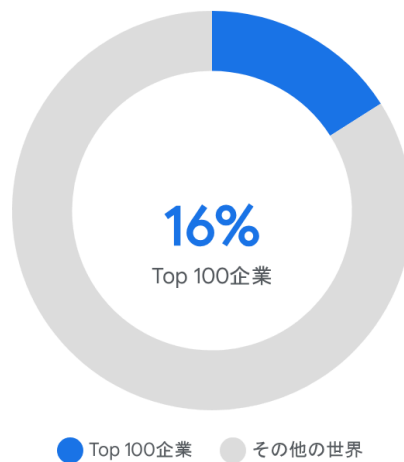


図1: Top 100 イノベーターの地理的集中と、世界の高強度AI発明に対する同コホートの不均衡な影響力。

データソース: [Thailand Business News](#), [Blackburn Drone](#), [TechIntelPro](#), [Clarivate](#)

2. 評価手法の解剖: イノベーションのアルゴリズム

Top 100の意義を理解するためには、まずその測定機器である評価手法を解剖する必要があります。*Fast Company*や*Fortune*などが実施する主観的な評判調査やアンケートベースのランキングとは異なり、クラリベイトの評価は純粋に定量的であり、「Derwent Strength Index(ダーウェント・スト

レングス・インデックス)」に基づいています。この手法は、マーケティングによるノイズを排除し、知的財産の資産としての質のみに焦点を当てるよう設計されています⁷。

2.1 データの基盤: DWPI

分析の基盤となるのは、**Derwent World Patents Index (DWPI)** および **Derwent Patent Citation Index** です。このデータベースは、特許情報のゴールドスタンダードと見なされています。その理由は、専門の編集者による人為的なキュレーションにあります。特許弁理士が権利範囲を広げるために意図的に曖昧な表現を用いた発明の要約やタイトルを、編集者が技術的な新規性を明確にする形へとリライト・修正します。この「クリーニングされた」データにより、異なる国で出願された同一の発明に関連するすべての特許を一つの分析単位（パテントファミリー）として正確にグルーピングすることが可能になります⁸。

2.2 ツイントラック評価システム: 漏斗（ファネル）の力学

選定プロセスは、数百万件の発明を最終的な100の組織に絞り込むための厳格なフィルタリングメカニズム（ファネル）として機能します。

トラック1: 数量的適格性（ゲートキーパー）

イノベーションには一貫性が求められます。評価の対象となる土俵に上がるためだけでも、組織は厳しい数量的閾値をクリアする必要があります。

- **500件以上の出願発明**: 2000年以降に少なくとも500件の特許出願を行っている必要があります。これにより、一発屋や産業的規模を持たない小規模なスタートアップはフィルタリングされます⁹。
- **100件以上の登録発明（直近5年間）**: 直近5年間の評価期間内に、少なくとも100件の特許が*登録（権利化）*されている必要があります。これは、過去の遺産ではなく、現在の活力を測定するためです⁹。

トラック2: Derwent Strength Index（質のフィルター）

数量的閾値をクリアした後は、特許の「数」はランキングの決定要因ではなくなります。代わって、各パテントファミリーが4つの定性的指標でスコアリングされます。最終的なランキングは、組織のポートフォリオ全体のスコアの中央値によって決定されます。この「中央値ベース」のアプローチは極めて重要です。なぜなら、質の低い特許を乱発して件数を稼ぐ企業は、質の低いロングテールが中央値を押し下げるため、このシステムではペナルティを受けることになるからです⁹。

Derwent Strength Indexを構成する4つの柱は以下の通りです:

指標 (Metric)	定義 (Definition)	2026年における重要性 (Significance)
-------------	-----------------	-----------------------------

影響力 (Influence)	自社の特許が他社の特許出願において引用された回数。	極めて高い。これは「破壊的革新」の最も強力な代理指標です。競合他社が自社の技術の上にさらなる技術を構築している場合、それは基礎的なイノベーションであることを意味します。AI時代において、初期の生成AI特許はこのスコアが急騰しています ⁶ 。
成功率 (Success)	出願数に対する登録特許の比率。	中程度。高い成功率は、高いR&D効率と強力な内部審査プロセスを示唆します。実現不可能なアイデアにリソースを浪費していない証左となります ⁹ 。
グローバル性 (Globalization)	その発明が保護されている主要な特許庁 (USPTO, EPO, JPO, CNIPA等) の数。	高い。グローバルな特許出願は高コストです。企業が発明を複数の管轄区域で保護する場合、それはそのアイデアが世界市場で商業的価値を持つという「確信」の表れです ⁶ 。
希少性 (Rarity)	特許に付与された技術分類コード (IPC/CPC) の統計的なユニークさ。	高い。既存の混雑した分野 (漸進的改良) か、技術クラスの新規な組み合わせ (ブレークスルー) かを測定します ⁹ 。

2.3 2026年の洗練: AIによる重み付けの変化

2026年の評価では、AIの統合が暗黙のうちに勝敗を分けました。レポートは、一貫したイノベーションのリーダーシップが今や「戦略的意図 (Strategic Intent)」と深層学習の統合にかかっていると指摘しています。単にハードウェアの改良を特許化している企業の「影響力」スコアが停滞する一方で、AI駆動のハードウェア最適化 (例: チップ設計におけるAI活用、医療画像診断へのAI統合) を特許化している企業は、広範なテック業界からの引用が増加し、スコアを急伸させました⁴。

かつて、特許の世界は1400万件以上の発明が存在する巨大な海でした。クラリベイトの手法は、まず「トラック1」のフィルターでこの海を適格な候補者プールへと絞り込み、次に「トラック2」の4つの指標を用いて、それらをトップ100へと結晶化させます。このプロセスにおいて、自己宣伝やマーケティング予算は一切考慮されず、特許ごとの冷徹なデータのみが勝者を決定します⁶。

3. 2026年の地政学的ランドスケープ: イノベーションの勢力図

2026年のレポートは、イノベーション能力が特定の地域クラスターにますます集中している世界の姿を描き出しています。データは、東アジア(日本、中国、台湾、韓国)、北米(米国)、そして停滞する欧州という「三極構造」がより鮮明になったことを示唆しています。

3.1 アジアの覇権

アジアの優位性は、本レポートの最も顕著な特徴です。Top 100のうち**62**の組織がアジア地域から選出されており、アジアは事実上、ハードウェア、エレクトロニクス、産業用R&Dにおける世界の重心となっています¹¹。

- 日本(32社): 依然として数量において圧倒的なリーダーです。日本のイノベーションモデルは、複雑な機械、化学、自動車セクターにおける深い垂直統合によって特徴づけられています⁵。
- 台湾(12社): 台湾の台頭は半導体時代の象徴です。もはや単なる製造ハブではなく、台湾企業(主に半導体エコシステム)はチップアーキテクチャや高度なパッケージングにおける基礎特許を確保しています¹¹。
- 韓国(8社): 財閥(サムスン、LG)によって支配される韓国のイノベーションは、高度に集中していますが極めて強力です。サムスン電子が総合1位の座を維持したことは、バイオファーマから6G通信に至るまで、そのR&Dエンジンの巨大な規模と質を証明しています³。
- 中国本土(7社): 中国の存在感は7組織へと拡大しました。これは、中国の「戦略的新興産業」政策の成熟を反映しています。ランクインしたのはもはやインターネットの巨人だけでなく、ZTEや**CXMT(長江メモリ)**といったハードウェアおよび通信インフラのプレーヤーが含まれており、メモリチップIP空間への中国の攻撃的な参入を示しています⁷。

3.2 米国: ソフトウェアとシステムの安定性

18の組織を擁する米国は、安定した2位を維持しています。Top 100における米国のイノベーションの性質は、アジアとは大きく異なります。アジアがコンポーネント(部品)と素材で支配的であるのに対し、米国の代表企業はシステムアーキテクチャ、航空宇宙(ボーイング)、プラットフォーム技術に重点を置いています⁶。特筆すべきは、2026年における**Apple**のTop 100への復帰です⁷。長年、Appleの秘密主義的なR&Dと絞り込まれた特許戦略は、広範なコングロマリットと比較してランキングから外れることがありましたが、今回の復帰はVision Pro(空間コンピューティング)や独自シリコン(Mシリーズチップ)に関連する特許の急増と、それらが業界に与えた「影響力」の大きさを反映していると考えられます。

3.3 欧州: 旧大陸の苦闘

欧州の代表数は依然として脆弱です。**ドイツ(8社)とフランス(5社)**が大陸を支えています、全体的なトレンドはアジアの加速に対する停滞です。欧州のイノベーションは、自動車、航空宇宙(エアバス)、化学といった伝統的な牙城に留まっています。Top 100に欧州のデジタル・ジャイアントが含まれていないことは、米国や中国に匹敵するハイパースケーラーを生み出すことへの欧州の苦闘を浮き彫りにしています⁶。

イノベーションの重心移動：地域別トレンド（2024年～2026年）

● 2024年 ● 2025年 ● 2026年

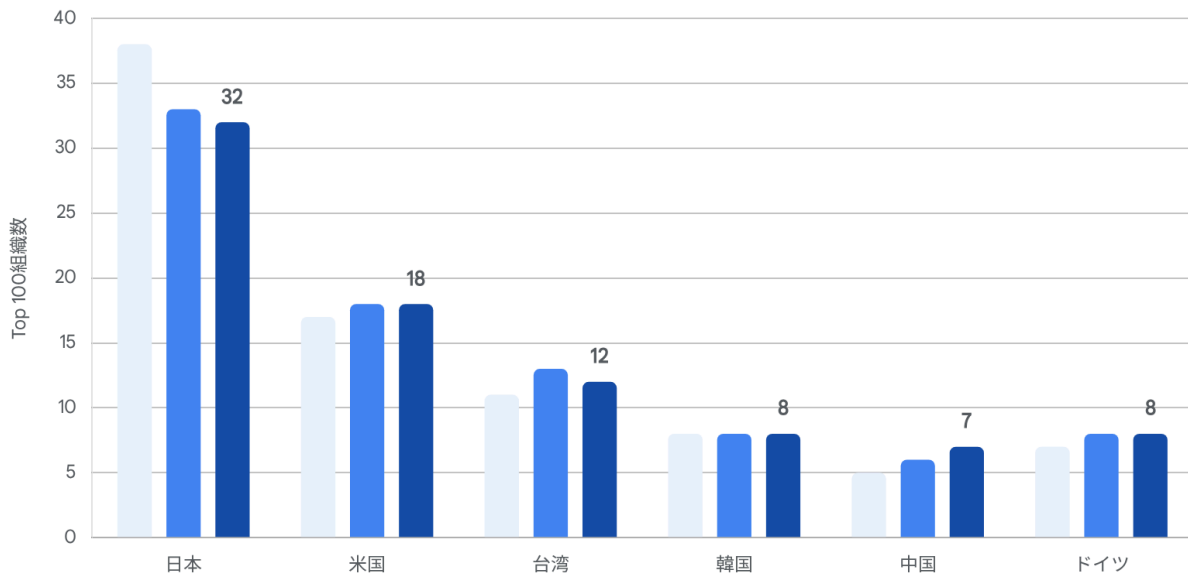


図3：日本は緩やかな減少傾向にあるものの首位を維持しており、台湾と中国は上昇の勢いを見せています。米国は安定した基準を維持しています。

データソース：Thailand Business News, Blackburn Drone, TechIntelPro, Clarivate

4. 日本企業の深層分析：32社の巨人たち

2026年のレポートにおける日本のパフォーマンスは、強靱さと変革の物語です。**32社**という数字はリスト全体の約3分の1を占めています。この支配力は、日本の「失われた数十年」というマクロ経済的な語り口とは直感的に矛盾するように見えますが、グローバルサプライチェーンの現実とは完全に一致しています。日本はテクノロジーの「チョークポイント」——それがなければ世界経済が機能しない高度な素材、精密センサー、ロボティクス——を掌握しているのです⁵。

4.1 32社の内訳と産業クラスター

公開された情報、各社のプレスリリース、および過去のデータとの照合に基づき、Top 100に選出された日本企業32社の全貌を明らかにします。これらは明確に4つの「産業エコシステム」にクラスター化されます²。

クラスターA: エレクトロニクス & 半導体のバックボーン

これは最強のクラスターであり、世界のスマートフォン、データセンター、EVに不可欠なコンポーネントを供給しています。

- **ソニーグループ (Sony Group):** 16回連続の選出。CMOSイメージセンサーにおける特許と、自動運転向けのAIセンシング技術は業界のベンチマークです⁷。
- **キオクシア (Kioxia):** 5年連続。NAND型フラッシュメモリのリーダーとして、同社の3D BiCS FLASH™技術に関するIPは、AIデータブームの根幹を支えています¹⁵。
- **東京エレクトロン (Tokyo Electron):** 6回目。半導体製造装置の支配的プレーヤー。チップが2nm以下へと微細化する中、成膜・塗布・エッチングにおける特許は不可欠です¹⁷。
- **SCREENホールディングス (SCREEN Holdings):** 5年連続。半導体洗浄装置における世界シェアNo.1の実績が、堅牢な特許網に支えられています¹⁹。
- **TDK, 京セラ (Kyocera), 村田製作所 (Murata):** これらの電子部品大手 (MLCC、セラミックパッケージ) は、模倣困難な独自の材料配合に関する「希少性 (Rarity)」の高い特許ポートフォリオを保有しています⁵。
- **日東電工 (Nitto Denko):** ディスプレイや半導体に使用される産業用テープや光学フィルムの達人です⁵。
- **セイコーエプソン (Seiko Epson):** 13回目の選出。ピエゾ方式のプリント技術やウェアラブルにおける精密技術が評価されています²²。
- **リコー (Ricoh), キヤノン (Canon), ブラザー工業 (Brother), コニカミノルタ (Konica Minolta), 富士フイルム (Fujifilm):** 伝統的な「事務機器」の巨人は、そのイメージング特許を産業用印刷、医療画像、スマートビジョンといった新領域へと成功裏にピボットさせています⁵。
- **ルネサスエレクトロニクス (Renesas Electronics):** 自動車用マイコン (MCU) の強豪であり、SDV化に伴う制御系IPの重要性が増しています²⁴。
- **富士通 (Fujitsu) & NEC:** 従来のIT大手でありながら、現在はAI、5G/6Gネットワーク、スーパーコンピューティング (富岳など) に特許資源を集中させています⁵。

クラスターB: 自動車産業の変革

自動車産業がソフトウェア・デファインド・ビークル (SDV) へと移行する中、日本の自動車メーカーはEVDライブトレインと全固体電池の特許確保に奔走しています。

- **トヨタ自動車 (Toyota):** 常連企業。トヨタのポートフォリオは、全固体電池技術において世界最大であり、これが「影響力」スコアの主要なドライバーです⁷。
- **本田技研工業 (Honda):** eVTOL (空飛ぶクルマ) や自律システムへの注力が目立ちます⁷。
- **SUBARU:** 2026年の**新規選出 (再選出)** 企業。SUBARUのリスト復帰は、運転支援システム「アイサイト」やAIベースの安全システムへの積極的な特許出願が、安全領域での高い引用率につながったものと推測されます⁴。
- **矢崎総業 (Yazaki):** ワイヤハーネスの世界的リーダーであり、高電圧EVの配電システムへと軸足を移しています⁵。
- **ブリヂストン (Bridgestone):** センサーを搭載した「スマートタイヤ」やサステナブル素材でのイノベーション²²。
- **デンソー (Denso):** 電動化と熱マネジメントに不可欠なティア1サプライヤー (文脈より確実視)²⁴

。

クラスターC: 重工業・ロボティクス(ファクトリーオートメーション)

このクラスターは、AI革命の「物理層」における日本の支配力を象徴しています。

- **ファナック (Fanuc):** 7回目、5年連続。CNCと産業用ロボットの世界リーダー。AIを用いてロボットの故障を予知する「ZDT (Zero Down Time)」システムは、2026年レポートのテーマである「AIの精度」の好例です²⁶。
- **三菱電機 (Mitsubishi Electric):** 14回目。ファクトリーオートメーション (FA)、パワー半導体 (SiC)、HVACの巨人。同社のAIブランド「Maisart (マイサート)」は知財戦略の中心にあります²⁸。
- **三菱重工業 (MHI):** エナジートランジション (水素タービン) や防衛・宇宙分野の技術⁵。
- **コマツ (Komatsu):** 自律走行マイニングダンプなど、建設機械の自動化におけるパイオニア²²。
- **ニデック (Nidec):** 世界No.1のモーターメーカー。HDDからEV用トラクションモーターまで、動くもののすべての心臓部を握っています⁵。

クラスターD: 先端素材・化学

サプライチェーンの「隠れたチャンピオン」たちです。

- **信越化学工業 (Shin-Etsu Chemical):** シリコンウェハーとフォトリソの重要サプライヤー。信越の化学技術なしでは世界のチップ産業は機能しません⁷。
- **住友化学 (Sumitomo Chemical):** 5年連続。ディスプレイ材料や半導体プロセス薬品に注力³²。
- **住友電気工業 (Sumitomo Electric):** ワイヤハーネス、化合物半導体、光ファイバー技術⁵。
- **AGC:** ディ스플레이用ガラス、自動車用ガラス、そして近年拡大するバイオ医薬品CDMO事業⁹。
- **日立製作所 (Hitachi):** インフラ、IT、エネルギーを横断するコングロマリットとして、社会イノベーション事業を知財面から支えています⁷。

その他の選出企業として、**NTT** (IOWN構想などの光通信技術)、**オリンパス** (内視鏡・医療機器)、**ダイキン工業** (11回目の選出、空調・冷媒技術) などが挙げられます⁵。

以下は、2026年の受賞が確認された主要日本企業の一覧です (一部推測を含む)。

産業セクター	企業名 (順不同)	選出ハイライト・備考
電機・電子・精密	ソニーグループ、キオクシア、東京エレクトロン、SCREEN、TDK、京セラ、村田製作所、日東電工、セイコー	半導体製造装置、イメージング、電子部品における圧倒的シェアと「希少性」スコアの

	エプソン、リコー、キヤノン、ブラザー工業、富士フイルム、パナソニックHD、ルネサスエレクトロニクス、富士通、NEC、オムロン	高さ。
自動車・輸送	トヨタ自動車、本田技研工業、SUBARU、矢崎総業、ブリヂストン、デンソー	SUBARUの復帰（アイサイト等の安全技術評価）。電動化・知能化特許の蓄積。
重工業・機械・FA	ファナック、三菱電機、三菱重工業、コマツ、ニデック、ダイキン工業	ロボティクスとAIの統合（ファナック、三菱電機）。環境技術（ダイキン）。
化学・素材・通信	信越化学工業、住友化学、住友電気工業、AGC、日立製作所、NTT	5G/6G通信インフラ（NTT、NEC）。半導体サプライチェーンのチョークポイント（信越、AGC）。

4.2 減少の分析（38社→32社）：何が起きているのか？

日本企業は2024年の38社から、2025年の33社（推定）、そして2026年の32社へと緩やかに数を減らしています。この減少は必ずしもイノベーションの失敗を意味するものではなく、むしろ戦略の乖離を示唆しています。

1. 「影響力」の選択バイアス：クラリベイトの手法は「影響力（引用数）」を重んじます。日本企業は歴史的に、ケイレツ（系列）のエコシステム内で相互に引用し合う傾向がありました。イノベーションがオープン化し、引用のネットワークがグローバル（特に米国・中国主導）になるにつれ、その輪の外にある企業のスコアが相対的に低下している可能性があります³⁵。
2. 「ハードウェアの罫」：日本企業はハードウェアAI（ロボット、センサー）には強いものの、生成AIモデル（LLM）そのものでは遅れをとっています。2026年のレポートは「高強度AI発明」にプレミアムを置いています。LLMやソフトウェアAIを支配する米中企業が、ハードウェア中心の日本企業よりも速いペースで影響力スコアを獲得している構造があります³⁶。
3. コングロマリット・ディスカウントと再編：東芝の再編や各社の分社化など、日本企業は構造改革の過渡期にあります。特許ポートフォリオが分割された場合、個々の事業体が「数量」の閾値を満たせなくなる、あるいは移行期に「成功率」が一時的に低下する可能性があります。

5. 時系列分析：過去からのトレンド

過去数年間のデータを振り返ると、イノベーションの重心移動がより明確になります。

- 2022-2023年：まだ「規模」が重視されていた時期です。日本企業は35社前後で推移していま

したが、中国企業の台頭はまだ限定的(数社程度)でした。

- **2024年**: 日本が38社とピークを記録。しかし、この時期から韓国・台湾勢の半導体分野でのスコア上昇が目立ち始めました¹¹。
- **2025年**: 日本が33社へ減少。一方で、中国企業の質的向上がデータに表れ始め、政府主導の「特許の量から質への転換」政策が功を奏し始めました⁶。
- **2026年**: 「精度」とAIへのピボット。日本の減少トレンドが継続(32社)する一方、中国(7社)や台湾(12社)の存在感が固定化。特に、AI関連の発明強度がランキングの決定的な差別化要因として浮上しました²。

このトレンドは、汎用的な製造業から、AI・半導体・先端素材に特化した「スペシャリスト」へと、イノベーションの価値がシフトしていることを物語っています。

6. 評価と批判的考察: 多角的な視点

6.1 肯定的な見方: 質の証明とアンチ・ハイプ

クラリベイトのTop 100は、現代のビジネス環境において極めて重要な機能を果たしています。それは**「ハイプ(誇大宣伝)への解毒剤」**としての役割です。

- **戦略的検証**: 決算説明会で「AI」という言葉を連呼するだけで株価が上がるような時代において、Top 100は「実績(Proof of Work)」を要求します。サムスン、ホンダ、信越化学といった16の常連企業にとって、この受賞はCEOの交代や経済サイクルを超えて生存する企業文化の証明であり、イノベーションが偶発的なものではなく、組織的に管理されたものであることを投資家に示します³。
- **「AIの現実確認」**: Top 100企業が高強度AI特許の16%を保有しているという事実は、深い洞察を与えます。これは、無数のスタートアップがAIを利用している一方で、AIの発明(アーキテクチャ、最適化手法、ハードウェア統合)そのものは、依然として潤沢な資金を持つインカムベント(既存の大企業)によって主導されている現実を浮き彫りにしています。「AI革命」は、逆説的に旧来の巨人の力を強化しているのです³。

6.2 否定的な見方: 手法の死角

しかし、このレポートはいくつかの重要な注意点(Caveat)を持って解釈されるべきです。「Derwent Strength Index」は厳密ですが、真のイノベーションの姿を歪めるバイアスを含んでいます。

- **「特許バイアス」**: この手法は、特許が主要な防御壁となる産業(ハードウェア、製薬、化学)を本質的に優遇します。一方で、ソフトウェア、SaaS、プラットフォーム企業は過小評価されがちです。NetflixやAirbnb、あるいはMicrosoftやAmazonの一部でさえ、特許よりもトレードシークレット、ネットワーク効果、実行スピードに依存しています。ソフトウェアのコードは、特許が付与される頃には陳腐化していることが多いためです。結果として、このリストは「シリコンバレーモデル」のイノベーションを十分に捉えきれていません⁶。
- **「タイムラグ」の問題**: 特許は出願から公開まで18ヶ月、登録まで3~5年を要します。したがって、2026年のリストは、実質的には**2021年から2023年頃**に行われたR&Dの意思決定を反映しています。これは「遅行指標」です。2024年以降のLLMの爆発的普及や最新の生成AIトレンド

が、このランキングに完全に反映されるのは2028年以降になるでしょう。

- 地域的偏り: 手法の「グローバル性」指標(主要特許庁への出願)は、日本やドイツのような輸出志向型経済を有利にします。巨大な国内市場(インドやブラジルの特定の革新的サービスセクターなど)のみに注力し、グローバル出願を行わない革新的な企業にはペナルティとなる可能性があります。

7. 結論: イノベーションのパラドックス

「クラリベイト Top 100 グローバル・イノベーター 2026」は、単なる表彰リスト以上の意味を持っています。それは世界経済の診断ツールです。このレポートは、基礎的なイノベーションへの参入障壁が高まっている世界を映し出しています。わずか100社がAI発明強度の16%を握っているという事実は、AI時代がインターネット時代よりも寡占になる可能性を示唆しています。

日本にとって、このレポートは「モノづくり」哲学——テクノロジーの物理層を支配する能力——の有効性を証明するものです。32社の日本企業にとっての課題は、このハードウェアの支配力を、評価手法が今や報酬を与える「ソフトウェア定義の影響力」へと翻訳することです。

観察者にとっての教訓は明確です。2026年において、イノベーションとは「誰が最も多くのアイデアを持っているか」ではありません。「誰が最も強力なアイデアを持ち、それを強制できるグローバルなリーチを持っているか」なのです。手法が「量」にペナルティを与え、「影響力」に報いるように進化したことで、数に基づく「特許戦争」の時代は終わり、質を巡るより冷徹で精密な戦争へと移行したと言えるでしょう。

引用文献

1. Top 100 Global Innovators: Building a culture of innovation | Clarivate, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://clarivate.com/intellectual-property/webinars/top-100-global-innovators-building-a-culture-of-innovation/>
2. Clarivate Reveals Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://ir.clarivate.com/news-events/press-releases/news-details/2026/Clarivate-Reveals-Top-100-Global-Innovators-2026/default.aspx>
3. Clarivate Unveils 2026 Top 100 Global Innovators, AI Patents ..., 1月 24, 2026にアクセス、
<https://intellectia.ai/news/stock/clarivate-unveils-2026-top-100-global-innovators-ai-patents-represent-16>
4. Clarivate 2026 Top 100 Global Innovators Led by AI Shift, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://techintelpro.com/news/ai/generative-ai/clarivate-2026-top-100-global-innovators-led-by-ai-shift>
5. クラリベイト、Top100グローバル・イノベーター2026を発表, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://clarivate.com/ja/news/clarivate-reveals-top-100-global-innovators-2026/>
6. France Still Has The World's Most Innovative Public Body In 2026 ..., 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.blackburndrone.co.uk/24-167703-n-france-still-has-the-worlds-most-innovative-public-body-in-2026-but-slips-to-7th-place-in-national-rankings/>

7. Clarivate Reveals Top 100 Global Innovators 2026 - PR Newswire, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.prnewswire.com/news-releases/clarivate-reveals-top-100-global-innovators-2026-302665439.html>
8. ASUS Listed Among Clarivate's Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://press.asus.com/news/press-releases/asus-clarivate-global-innovators-2026/>
9. Top 100 Global Innovators 2022, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.fm-house.com/wp-content/uploads/2022/08/Top-100-Global-Innovators-2022.pdf>
10. CATL Named Among Clarivate's Top 100 Global Innovators, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.catl.com/en/news/6398.html>
11. Clarivate Reveals Top 100 Global Innovators 2024, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://clarivate2023indexrb.q4web.com/news-events/press-releases/news-details/2024/Clarivate-Reveals-Top-100-Global-Innovators-2024/default.aspx>
12. Clarivate Reveals Top 100 Global Innovators 2025, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.thailand-business-news.com/pr-news/clarivate-reveals-top-100-global-innovators-2025>
13. 科睿唯安公布2026年全球百大創新機構 - Clarivate, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://clarivate.com/zh/news/clarivate-reveals-top-100-global-innovators-2026/>
14. NEC、Clarivate「Top 100 Global Innovators」に15回連続で選出, 1月 24, 2026にアクセス、
https://koubo.jp/press-release/prtimes/c78149_r1193
15. Kioxia Selected in Clarivate Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.kioxia.com/en-jp/about/news/2026/20260122-1.html>
16. 第15回「Clarivate Top 100 グローバル・イノベーター2026」を受賞, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.kioxia.com/ja-jp/about/news/2026/20260122-1.html>
17. Tokyo Electron Wins Recognition as a Clarivate Top 100 Global ..., 1月 24, 2026にアクセス、
https://www.tel.com/news/topics/2026/20260122_001.html
18. 「Clarivate Top 100 グローバル・イノベーター 2026」を受賞, 1月 24, 2026にアクセス、
https://www.tel.co.jp/news/topics/2026/20260122_001.html
19. SCREEN is chosen as a Clarivate Top 100 Global Innovator for 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.screen.co.jp/en/news/NR260123E>
20. 「Clarivate Top 100 グローバル・イノベーター 2026」を受賞, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.screen.co.jp/news/NR260123>
21. Kyocera Named to "Top 100" Global Innovators List for Fifth ..., 1月 24, 2026にアクセス、
<https://global.kyocera.com/newsroom/news/2026/001155.html>
22. Epson Ranked 6th among Clarivate Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://corporate.epson/en/news/2026/260122.html>
23. Ricoh named a Clarivate Top 100 Global Innovator 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
https://www.ricoh.com/info/2026/0122_1
24. Clarivate Reveals Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://clarivate.com/news/clarivate-reveals-top-100-global-innovators-2026/>
25. 「知財」に関するプレスリリース一覧 - PR TIMES, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://prtimes.jp/topics/keywords/%E7%9F%A5%E8%B2%A1>

26. Awarded the 'Clarivate Top 100 Global Innovators 2026 ... - Futubull, 1月 24, 2026
にアクセス、
<https://news.futunn.com/en/post/67729523/awarded-the-clarivate-top-100-global-innovators-2026-for-technological>
27. FANUC Honored as a Clarivate Top 100 Global Innovator 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.fanuc.co.jp/en/profile/pr/newsrelease/2026/notice20260122.html>
28. 三菱電機、「Top 100グローバル・イノベーター2026」に14回目の選出...知的財産活動
が高評価, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://response.jp/article/2026/01/23/406426.html>
29. Mitsubishi Electric Named to Clarivate Top 100 Global Innovators ..., 1月 24, 2026
にアクセス、<https://www.mitsubishielectric.com/en/pr/2026/0122/>
30. 「Clarivate Top 100 グローバル・イノベーター 2026」に選出, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.mitsubishielectric.co.jp/ja/pr/2026/0122/>
31. Clarivate Names Top 100 Global Innovators 2023, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://librarytechnology.org/pr/28516>
32. Sumitomo Chemical Receives Clarivate Top 100 Global Innovators ..., 1月 24, 2026
にアクセス、
<https://www.sumitomo-chem.co.jp/english/news/detail/20260122e.html>
33. Daikin Selected for Clarivate Top 100 Global Innovators 2026, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.pressreleasepoint.com/daikin-selected-clarivate-top-100-global-innovators-2026>
34. Daikin Selected for “Clarivate Top 100 Global Innovators 2026”, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.daikin.com/press/2026/20260122>
35. 戦略的転換点としてのNEC「知財DX事業」: 包括的市場分析と競争 ..., 1月 24, 2026に
アクセス、
<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/3de020d27cd7b61477c2.pdf>
36. Top100グローバル・イノベーター2026 レポート ... - Clarivate, 1月 24, 2026にアクセス、
https://interest.clarivate.jp/top100_2026
37. それでも「特許の質」で日本が世界トップの理由AI特許100万件時代 ..., 1月 24, 2026に
アクセス、https://note.com/tomos_ai_lab/n/n5c9150c6ea6c
38. Clarivate Top-100-Innovators Report | PDF - Scribd, 1月 24, 2026にアクセス、
<https://www.scribd.com/document/746948085/Clarivate-Top-100-Innovators-Report>